

卸町再生計画

歴史及び現状

ここ福山の繊維が産品となった起源は、江戸時代の初め、福山藩主となった水野勝成は木綿の栽培を奨励して藩内に広め、備後織物や備後耕といった産品が生まれている。現在では、藍染め技術を活かした綿デニムを中心に、デニムは全国シェア50%を占めている。しかし、現在では企業規模の縮小・生産性の悪化につながり、繊維産業は低下している。今後の課題として福山の繊維の歴史や文化を維持し、伝達していく必要がある。

目的

備後の繊維産品を集め、展示を行えるコンベンションセンターを提案。また、衣類の制作現場体験・染色体験が行えるばを設け、商業施設も兼ね備えた1つの町として考える。「ものづくりの町・福山」としてまずは地元の人に知り、発信し、多くの人に知ってもらおう。そうすることにより、福山における繊維歴史の認知度にも大きく貢献できると考えられる。

敷地選定

福山駅東南の海沿い近くにある卸町を計画地とし、図1に示す。昭和50年代の繊維業が盛んであった時代にでき、卸業を中心とした企業が集まった。現在では流通構造の変革などもあり、駅からはバスか車でしか移動できないため、活気はない。再活性化するために、「store house」といったイベントを開催している。

調査結果として図2に示す。倉庫がたくさんあり、平日は車通りも多く、トラックの行き来が目立った。また、住宅がないためいつもとは違う雰囲気があった。



計画地



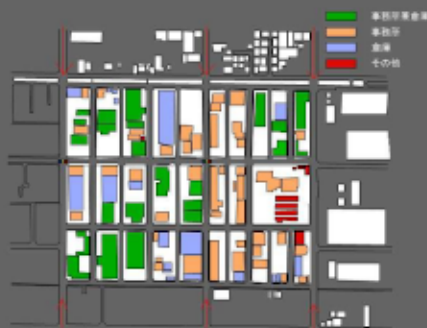
卸町センター



事務所兼倉庫



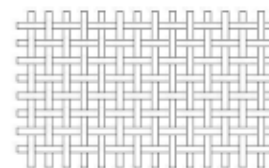
倉庫



調査結果



ダイアグラム



昔のようにイベントも少なく閑散としている。また、使われていない建物もあった。卸町全体を活気があふれた町にする。

繊維の織り方として経糸と横糸を交互に織る。模様は左右対称となり、切れず繋がることで一つの作品が完成する。

繊維の織り方を参考にし、コンベンションセンターを格子状の壁を作り、切れず繋がっているようにする。

移動手段であるペデストリアンデッキも平面図から見て格子状に作り、切れず繋がっているにする。このように計画する事で、卸町の活性化となる。